
ARジョー

友神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARジョー

【Nコード】

N7611Z

【作者名】

友神

【あらすじ】

21世紀を迎えた現在、遂に進化の扉が開けられ、神の計画が行われる。

ARゴーグルを手に入れた、『犀川丈』（サイカワ・ジョー）は相棒達、『ボルティス』、『ノストラ』と共にレイジール（評価者）としてパラレルワールドを冒険する。

評価者とは？ 神の計画とは？ また進化とは？

魔法とSFと巨女でお送りする、ファンタジーアクション

ここに開幕

プロローグ

プロローグ

自分が覚えている一番古い記憶は、まだ幼く、立つ事も歩く事も出来ない頃のものだ。

まぶしいほど日のあたる部屋、白木に、水鳥と魚の絵飾りが付いたベビーベッドに寝かされ、窓の外をぼんやり眺めて、退屈していた印象がある。

その頃は、自分意外、人を含め世界は作り物だと思っていた。自分が眠ると全てが止まり、自分が起きれば全てが動きだす……。世界は、センサーの付いたオモチャみたいな、そんな様モノだと思っていた……。

1874年

ドイツ ヘッセン

深夜、城の回廊をローブ姿の二人の男が、灯りも持たずに駆け上がって行く。

夕方から降り続いている雨により、外から時おり激しい雷の音が回廊内にも聞こえて来る。

男達は、まさにこの雨と稲妻と闇に紛れて城にやって来た暗殺達だ。

暗い回廊を登り、さらに廊下の奥に進むと、豪華に装飾された扉の前で男達は止まった。

互いに目で合図を送ると、ローブからナイフを取り出し、微かな衣擦れの音だけで部屋に忍び込んで行く。

手慣れた者の動きだ。

そして、そのままの速さを保ちながら寝室に向かい、この部屋の主であろう者が寝るベッドにナイフを突き立てた。

「!?!」

手応えに違和感を感じ、暗殺者達は咄嗟に辺りを見回す。

すると男達が入って来た扉の横、暗がりから男が現れた。

「わざわざヘッセンまで追って来るのはヴァチカンの犬達かと思っていたが、イルミナティとはね。」

現れた男は、見た目20代後半見える。この時代に珍しくオールバックに口の回り髭を蓄えた、端正な顔の紳士であった。

「敵の敵は味方なワケか……なる程。しかし良いのかね? 結んだ縁は、後世まで影響力を及ぼすが。愚者の列の先頭に名を成す事になるぞ。主もさぞかし嘆くだろう、パウロ含め後世の弟子達には恵まれないからな。」

「サン・ジェルマンッ!」

「私も、その不肖の弟子の一人でもあるから、ヒトのことは言えないがね、ハハハ——」

サン・ジェルマン伯爵

18世紀のフランスに実在した謎の男。

ダイヤや宝石を作り出す錬金術を持ち、6ヶ国以上の言葉をたしなむ。巧みな話術で社交界の貴婦人達を魅了、ルイ14世からの信頼もあつく、あのカサノバやカリオストロ伯爵からの支持を受ける。マリーアントワネットに書簡を送り、フランス革命を告げたとも言われる。

その男が、ここドイツ、ヘッセンに潜伏していた。

伯爵は、そのまま暗殺者達と距離を取りながら、窓の近くに移動する。

「せっかく来てもらって悪いが、既に『プラウエル・コード』は全て揃えさせてもらったよ、こちら側の予定は完了した」
シュッ！

暗殺者の一人が切りかかる、その瞬間――

「不作法窮まりないですな……」

外の稲妻によって、時おり映し出される伯爵の影から、インバネス姿の初老男が現れ、男達のナイフを受けてた。

「すまないね、メルエル」

「恐れ入ります。」

メルエルと呼ばれた初老の男は、伯爵を背に、暗殺者達の前に立ちふさがった。

「伯爵様、そろそろお仕度を――」

「ん？ そんな時間か、なる程。では君たち、そろそろ失礼させてもらうよ」

出した懐中時計に目をこらし、おもむろに、窓を開ける。

「こちらでの用事はすっかり済んだからね、アデマール夫人に、宜しく伝えといてくれたまえ、7月の晩餐会はとても楽しめたと」

暗殺者達は何とか近づこうとするが、メルエルと呼ばれた男が邪魔をして、ナイフの刃をサン・ジェルマン伯爵に届かせる事が出来ない。

「それから、主との約束だから、コレを置いて行く」

伯爵は、どこから林檎くらいの水晶玉を取り出し、窓近くの檜ノ木に金細工をあしらったテーブルの上に置いた。

「この地球儀が、全ての始まりを告げるだろう、それまで準備をしておくがいい……」

地球儀と呼ばれた水晶玉は、よく見ると、その中では、放電とともに砂が渦を巻き、更にその渦の中心部に地球が見える。

「飼い主に伝えたまえ『1は世界を示し、2は純粹を示し、3は神聖を示す』3を成す者が《レイジール（評価者）》と呼ばれるだろう、ハハハハ――！」

高らかな笑い声と共に、伯爵と初老の男は窓の外に飛び出した。

―その瞬間、稲妻が激しく鳴り、飛び出した二人の身体を直撃した。

辺りは、目も焼くほどの光と轟音が包み、暗殺者達もとっさに身を伏せる――。

しばらくして光と音が消え、暗殺者達は怯えつつ窓の外を見た、すると伯爵達が飛んだ辺りの地面に、煤けた黒色の塊ができていた。雷鳴は遠くなり、雨は小降りになっていく。

「――死んだ？」

暗殺者達は、困惑と焦りの中、睨むようにその塊を眺ていた。

プロローグ（後書き）

ご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。

1、アポカリプス戦線

現代

スイス、ジュネーブ郊外、TDエレクトロニック本社

普段、田園風景が眺められる静かな『TDE』本社敷地内も、現在は、3機の攻撃ヘリが上空を爆音を立てて旋回し、機関銃やロケットランチャーで武装したフルプロテクトアーマーの兵士達が、本社社屋を囲むように配置し、すっかり様相を異していた。

『Takeda-Data-Electronic L,T,D』
——今から36年前、『武田電子株式会社』として創業、電子器械メーカーの中堅所で、主に業務用測量器具の製造販売や大手電子メーカーの下請けとして営んでいた。

2代目武田直治社長の英断により、集積回路の開発に携わる様になる。

今から11年前、バレン式遊離性積層型集積回路『佐助（CorndName-Sasuke-PR777225T）』や『響（CorndName-Hibiki-PR788494M）』の開発により、近年まさに飛躍的に業績を向上させた企業である。

現在は、本社をスイスジュネーブ郊外に移し、電子機器全般を扱う世界的企業となった。

最新装備で完全武装した兵士達が、本社社屋内の別部隊と交信を行っていた。

兵士達は、緊張した声で口元のマイクに喋りかける。

「ーナッシュ、画像が乱れている、現在の状況の説明をしろ」

『ザ、ザザザ……こちらナッ……れ以上敵を…構内に留め……けません……至急増援を、アー……ッ！…… ザザー——』

「ナツシュ応答しろ！ナツシュー！」

肩に金とオレンジのバッジを付けた男が、マイクに叫ぶ。

「クライン隊長！ パーシーとビヤンコ、サカザキのIDも消えました。全滅です！ 敵本隊が外に出てきます！」

横で肩にアサルトを掛けてモニターを持っていた兵士が叫んだ。

既に、本社社屋内は、敵勢力に完全に圧されていた。

クライン隊長が、カーゴヘリの方を睨み付けて

「《SAD》の第二陣はまだか！ はやく前に出せ！」

3フィート位のツノグモの様な6脚歩行の機体が兵士達の間から現れる。

《SAD》(Stand Alone Automatic Defenses)。

紛争地域での活動や対テロリスト等に最近用いられる小型ロボット戦車である。

《GAU-12》20ミリ ガトリング砲や、《スターストリーク》地対空ミサイルなど状況に応じ取付可能な、多目的型無人兵器。試作機がボスニア紛争末期に秘密理に投入され、その後、開発は進み現在はVer14となる。

ソフトウェアも向上し著しく、軽度の占領ミッションであれば、《SAD》のみで総て賄える様になっっていた。

独特の機械音をたてながら、9機の《SAD》が正面入口に進んで行く、

ギューイイイイーン――

ボボボボボボボボッ――！

ガトリング砲の銃身が回り出し、《SAD》達が一精掃射しだした。1分間に3600発の容赦ない攻撃に、本社ビル外壁の窓ガラスやブロック、コンクリート、あらゆる物が粉々に碎ける。まるで建物を削り取ってゆくようだ。

たちまち辺りは粉塵が立ち込み始め、視界が奪われて行く。

——やがて粉塵が煙となって、TDE本社ビルの高さまで昇る頃、社屋の中から2の影が現れた。

その影達は、1機の《SAD》に素早く近づく。——瞬間、40ミリの特殊合金できている装甲ごと、上下に千切り飛ばしていた。

「「!？」」

見ていた兵士達は、何が起きたのか理解出来ず、トリガーに掛かった指が止まる。

飛ばされた《SAD》の上部は、本社社屋西の駐車場に停めてたあった、1987年製《スタリオン GSR—VR》と、《フォルクスワーゲン・ゴルフTSI》に激突し爆発炎上。下部は、上空を旋回していた攻撃ヘリの1機、《ティーガーARH》（改良型）のコクピットを直撃、ヘリと共に本社社屋すぐ横の地上に叩きつけられた。

——爆発。

衝撃波と遅れて来た爆風に辺りは、パニック状態になる。

その隙を狙って影達は更に2機の《SAD》を破壊した。

「け、《獣に乗った女》が出て来た！」

爆風に粉塵があらわれ、影達が姿を現す。

高さは約1.6フィートくらい。その姿は、真っ赤な金属ボディに、細いシルエット、全身記号の様な、ペイントを施し、人と虫、ロボットを掛け合わせ様な異様な姿であった。

《獣に乗った女》と呼ばれた者達は、辺りを見渡し、かるく両手を下に振り下ろす。手首の部分から、片刃の長剣が飛び出してきた。蒼い放電現象と、こもった振動音が聞こえる。

電磁ソードだった。

「撃て、撃てー！！」

ガガガガガガ——ッ！

銃撃をかわし間合いをつめてくる。

兵士達は、応戦を試みるが、《獣に乗った女》達の、素速さに、銃口をついていかせる事が出来ない。

《ティーガーARH》からの攻撃も、《SAD》からも、闇雲に掃射するのが精一杯であった。

跳ぶ。回る。切る。《獣に乗った女》達は、高速で、物も人も差なく、辺りに在るもの全てを切断してゆく。兵士達は皆、血溜まりを作り、のたうち回り、《SAD》は装甲を、まるで紙の様に、切りぎざまれてゆく。

数十秒で本社社屋周りは、死体と鉄くずの山が出来ていた。

更に今度は、社屋から別のタイプの敵が、何十体も出て来た。

《SAD》を千切り飛ばした奴とは違い、ガンブルーの金属製ボディを持った、重量級モデルのようだ。

兵士達は、絶望感に捕らわれてしまった。

「クライン隊長！ ダメです、このままでは全滅します」

隊長と、呼ばれた男は口元のマイクをつまむと、のみ込む唾もなく、乾いた声で喋った。

「本部、こちらクライン中隊……」

2、アポカリプス戦線

現代、スイス上空15000フィート

雲海を遙か下に眺め、怪鳥が蒼弓の世界に巨大な羽を広げていた。ロシア製、《アントノフ An-124》。D18型ジェットエンジン4発、最大輸送力約170トン、世界最大級の積載能力を持つ超大型輸送機だ。

そのカーゴ部分を最新システムで埋め尽くし、あらゆる所に移動可能にしたミッションルームが設置されている。

内部は薄暗く、壁の大型モニターのバックライトと、各コンソールの光、それと足元を照らすセンサーライトのわずかな灯りだけ、その中で9人のオペレーター達が、各自の前にあるモニターを眺め情報を収集していた。

「オルグ司令、クライン中隊長より、爆撃機からの『TDエレクトロニクス社』本社社屋へのピンポイント攻撃の要請が来ました」

一番後ろ、指令席に近い軍服姿のオペレーターが、振り向きながら司令長官に伝える。

オルグ指令。

目元と眉毛の上に傷のある男。顔は浅黒く、頭はクルーカットにし、体格良く鍛え上げられ、まさに叩き上げの軍人と思える男である。先ほども、腕を組んだまま、指令席の前に仁王立ちしている。

「社屋内の生存者は？」

低く太い声がミッシェンルームに響く。

「社屋内に生態反応はありません」

「……わかった、攻撃を許可する」

「伝えます」

正面壁に設置されている大型モニターに《TDエレクトロニクス社》本社の上空にある、静止衛星からの動画が映し出されている。時々画面上にブロックノイズが現れるがそれは、ゲームか映画の様に、酷く現実感の無い様子で、次々に敵にやられてゆく兵士達の姿が見える。

オルグ指令がつぶやく。

「Mr・キーツ：今回、我々も十分時間を掛け、吟味し、準備してきたつもりだった。しかし、いざ本番となると、これほどの差があるとはな」

「私もここまで技術の違いがあるとは思いませんでした。しかも、今回はまだ始まりに過ぎません。予言では、この後に本格的なカタストロフィが始まると言われています。こうなりますと、遅れているAS計画の方を、より急がねばならないでしょう……」

仕立ての良いスーツを着て、プラチナブロンドの長髪を後ろで縛った背の高い男が、両手を後ろに組んだままの姿勢で後ろから答えた。

「キミのお父上の言う通りになってしまったな」

「父の言葉を借りれば、『それも全て、人と地球の運命』と言えるのでしょうかね」

「フェノロサムの地球儀が導いた運命か……会のメンバーは、皆、

知っているのか？」

「本当の理由を知っているのは、13人の家長とその関係者達だけです、後は表向きの理由しか伝えておりません」

「真実を伝える必要はないのか？」

「真実を伝えたところで、理解を得る事は出来ないでしょう、彼らは利益追求しか考えていませんから」

「教会側はどうなのかね？」

「今まで独自で、いろいろ工作して来た様ですが、今回の件で、我々と歩調を合わせると連絡が来ました、これからの作戦は、こちらからの立案で行われます」

「ドマ枢機卿、首が廻らなくなってきた様だな。」

「イギリスの『例の件』で手一杯だそうです」

「『主の再来』か、ガセと聞いていたが？」

「どうやら…」

「だとして、ほっておけば良いものを…」

「表向きはその様にしていますが、教義に関わる事なので、裏ではそうもいかない様です。」

「荊棘だな」

「まあ、その件のおかげで、結果的に教会側が勝手に場を荒らす事が無くなりましたので……次回の会合より参加が予定されています」

「フッフツ、つまり、また文句言う奴が増える訳だな」

「まあ、そうなりますね……」

2人供目を合わして、軽く苦笑いをした。

大型モニターでは、劣勢ながら《獣に乗る女》達と、果敢に戦う兵士の姿が映っている。

「取り敢えずは、我々も愛しき人類の為、最善を尽くすでしょう」
「……ですね」

鬱な気分を変えるように、オルグ指令は声のトーンを少し上げて指示を出す

「オペレーター、爆撃機は後、何分で着く？」

「後、5分程で攻撃地点に到着します」

「Mr. キース、スイス政府への対応は？」

「『政治献金』という形で、約定を取り付けてあります。この後は『本社ビルのガス爆発事故』して処理される事になります」

「ガス爆発事故か……オペレーター、爆撃機のパイロットに、『迷わず思いっきり派手にやってやれ』と伝えておけ。」

「了解——」

「政治的は問題なくても、こんな爆撃やればいくらでもボロがでる。最大限の時間稼ぎが出来れば良い、だから視覚的に事故としてわかりやすくするためだ。それから——」

そこまで言ってオルグ指令は、少し思案をする。そして、別のオペレーターに指示を出した。

「クライン中隊長を、呼び出してくれ」

「了解——」

「!？」

キースが美しい眉をひそめた。

「ん——気になる事があってな」

オルグ指令はモニターに目線をおくったまま応える。

そのうちモニター画面にクライン中隊長が、ブロックノイズにまみれて現れた。

「はい、ザザ：ザ：クラインです…」

「クライン、随分やられたな」

「ザ：はい：ボス。見ての通り：ザザ、完全にやられました：ザ：。機関砲の弾も、ロケットランチャー：ザ：も効きませ：ザ：」

「ノイズが酷いな。オペレーター、デジタル通信だろ？ 何とかならんのか」

「すいません、先程から調整していますが、昨日からの、太陽風の影響による通信障害です」

「こんな時にか。わかったークライン、もうすぐ爆撃機がそちらに着く、それまでもたせてくれ」

「ザザ：了解…」

「それとな、《獣に乗った女》達の行動で、何か気がついた事はなにか？」

「ザ：すいませ：ザ：よく聞き取れ：ザ：もう一度お願いします：ザ…」

「アイツらが、何故《TDエレクトロニクス社》に現れたのか、ヒントが欲しい。現地にいるお前の意見を聞きたい。気づいた事はないか？」

「…そうですね、ザザザ：アイツら：ザ：死んだ兵士達の身体に：ザ：何かやっています：ザ」

「！？」

言われて、オルグ指令は、もたれながら立っていた指令席の横から、モニター切り替えスイッチを操作する。メインモニターとサブモニターが切り替わり、クライン中隊長の画面が小さくなり、衛星動画が大画面化した。

更に、オルグ指令は画像を拡大する。大型モニターに、《獣に乗った女》達が兵士に近づく様子が見える。胸元が開き、中から1フ

イトくらい球体の機械が伸びて来た。それは兵士の顔近くまで寄り付き、フラッシュの様に紫色の点滅を始める。

「確かに…アイツら死体に何か機械を当ててるな」

「何か、をチェックしている様にも見えますね」

キースも、身を乗り出しモニターを見る。

「ザザ…、アイツらは、死体を見つけると、必ずその…ザ…行動をします…」

暫くすると、その球体は点滅が消え、再び胸元に収納された。

「あの行動は兵士だけにか？」

「ザ…社屋内でも、…ザ…同様の行動が確認…れています。ザ…：いえ、民間人に対しても、やっていましたが、ザ…《SAD》や他の物には…ザ…やってない様子でした」

オルグ指令は、腕を組み暫くの考え込んでいた。

「オルグ指令、あと2分で爆撃機が到着します」

オペレーターが、振り向く。

「むう…、クライン中隊長、話はよくわかった。続きは戻ったら聞かせてもらおう。そろそろ時間だ、敷地外に全員退避させてろ」

「ザザ…了解しました」

モニターから、クライン中隊長の姿が消え、代わりに爆撃機の様子を伝える動画に切り替わる。

オルグ指令は腕を組んだままその画面を見据えていた。
それ以降は、何も語らなかった。

その横でキースは、いつの間にか、ズボンのポケットに手を入れて、足元のカーペットを眺めながら、思考の海に身を漂わせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611z/>

ARジョー

2012年1月13日23時45分発行